

読めない本！

本が好きだ。

小学生のころは、旺文社文庫を集めた。天・地がきれいに裁断されて、紙製の箱に入っていた。小遣いをはたいて、お定まりの『猫』や『坊ちゃん』、『道草』、『虞美人草』、『硝子戸の中』といった漱石もの、太宰や谷崎や川端康成の諸作を買いそろえた。

まあ、本だから、読むこともあったが、読むために―だけ―買ったのではなかった。縦と横の長さを調節して組み上げて、巨大な賽子（さいころ）をつくろうとしたのだ。

この文庫本は岩波や角川などのそれに比べて少々大きく、かつ「かっちり」していた。なにより「箱」のあるのが魅力だった。厚手の良質のボール紙でできているので、多少揺らしても「ずれ」ることなく、安定している。平均すると8〜10冊を重ねて二つ並べると、16センチ四方ぐらいの賽子になる。これを基本モジュールとして組木の要領で、一辺180センチの賽子を建設しようと考えたのだ。今となっては不明としか言いようがないが、当時は賽子建設にかかる切実な動機があったのである。9歳の誕生日を迎える夏休みのことだった。当初はピラミッドの製作を企図したのだが、頂点を尖らせる工夫がつかず、断念した。ピラミッドから賽子に変更した理由も、よくわかってはいない。

コンテンツとしては、漱石の『猫』が最適で、8冊でびたりとモジュールになる。だが、『猫』一辺倒で組んだのでは面白くない。だいいち、同じ本が何十冊では、家人に書籍購入の意図がばれてしまう。その程度の智慧は子どもにもある。毎日、本屋さんに通っては旺文社文庫コーナーの書棚の前で、本の厚みを計測した。さすがに、物差しやメジャーを使うわけにはいかない。目分量である。どうにも高さのあわないモジュールが、川端康成の『名人』で完成したときは、さすがは日本の誇る文豪と、ノーベル財団に先んじて評価したものだ。

中島 敬介 Keisuke Nakajima



旺文社文庫

編集者。ユーラシア研究センター特任准教授。

1960年代

何年たっても賽子建設は捗らなかつた。主な原因は資金難だったが、これに人災が重なっていた。月に一度ぐらい、母が書棚に片付けて、几帳面な姉が番号順に並べ替えてしまうのだ。ふだんは気の合わない母娘が、こういうときだけ連携する。積んでは崩され崩されては積む、建設途上の本の賽子は、文字どおり「賽の河原」状態となったまま、ついには中学2年生の師走の一日、旺文社文庫購入資金調達のための酒屋の配達から戻ってみると、建設現場―すなわち私の部屋―は、きれいさっぱり更地にかわっていた。

母と娘が年末大掃除を兼ねて、賽子建設素材すなわち何百冊（とは、すこし大げさかもしれないが）もの旺文社文庫を処分したのだ。ほんとはダメって言われたんだけどねと得意気に母は言い、無理いつて交換してもらったのよと姉が言葉を継いだ。ふだんの合わない母娘も、こういうときだけ連携はできるのだ。隣の部屋でトイレットペーパーがピラミッド状に積み上がっていた。母と姉の合作らしい。悔しいが、完成にいたらなかつた旺文社文庫の賽子よりも、きれいな出来栄えだった。

・・・

姉の「好意」で、漱石の『猫』だけが残された。その晩、夜を徹して『猫』を読んだ。それ以外の何百冊もの―とは大げさだが―旺文社文庫は―感動して思わず箱から取り出した川端の『名人』を除き―まったく読めない本となった。

・・・

誰にも「読めない本」はあるだろう。ふつうに考えると、難解であるかあまりに大冊であるかが、その理由として思いつくが、はたしてそれだけだろうか。

私のような「読めない本」の経験は、そう一般的とは思えないが、そもそも個人の経験に普遍性などないだろう。

私が知っているあの人は、どんな本が・どんな理由で読めないのか。

興味がわいて、さっそく聞いてみた。

読書を薦める本の紹介はよくあるが、ここでは「読めない本」を紹介します。

ジャン・コクトオ『怖るべき子供たち』
 (東郷青児見訳・白水社・昭和五年・
 定價一圓五〇銭)、谷崎潤一郎『青春物
 語』(雪月花書房・昭和二十三年・定價
 二八〇圓)、同『過酸化マンガン水の夢』
 (粟本和夫発行・昭和三十一年・定價二
 八〇圓)、小林秀雄『無常といふ事』(札
 幌創元社・昭和三十年・定價三五〇円)。
 祖父が他界して、留学先の倫敦から一時
 帰国した三十一年前、蔵の中で母と一緒
 に私が手にした祖父の本である。蔵は叔
 父が大きな錠前を掛けてしまい長いこ
 と入っていないが、重い扉の向こうに未知
 の「読めない本」がある。今の私は何を
 手にするであろうか。

岡本 貴久子 Kikuko Okamoto
 国際日本文化研究センター共同研究員。

怖るべき子供たち
 ジャン・コクトオ/東郷青児見訳
 1930年 白水社



青春物語
 谷崎潤一郎
 1948年 雪月花書房



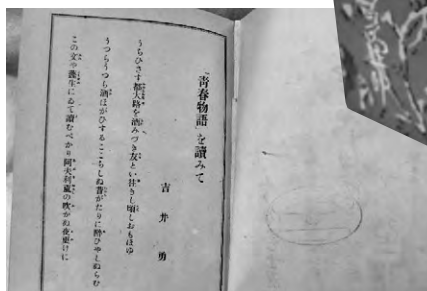
過酸化マンガン水の夢
 谷崎潤一郎
 1956年 粟本和夫刊行(中央公論新社)



無常といふ事
 小林秀雄
 1955年 札幌創元社



右：青春物語
 左：無常といふ事
 (東京創元社 1946年)



桐原 健真 Kenshin Kirihara

金城学院大学文学部教授。



小説全般

私にとつての読めない本と言えば、小説全般である。ある日、誰かの小説を読んでい
たとき、私は全くの無意識で傍線を引き、
書き込みをしてしまった。その瞬間、私に
とつてその小説は楽しみの対象ではなく、
研究資料になっていたのだと言える。こう
いう家業をしていると、すべてが研究資料
になってしまうのだと痛感したとき、作者
に大変申し訳ない気分になり、それ以来私
は、小説を資料としては読むが、小説とし
て読むことをやめたのである。

甲田 烈 Retsu Koda



『意識のスペクトル』 [1] [2]
Wilber, Ken. *The Spectrum of Consciousness*.
The Theosophical Publishing House. 1977

東洋大学円了研究センター
客員准教授。

K. ウィルバー著・吉福伸逸+菅靖彦訳
春秋社、1985年



「ティール組織」の発想の源として、注目を集めつつあるインテグラル理論。その開発者による処女作である。当時の値段でも2冊で5000円ほど。けれど高価とは言えないが、大学1年生には大きな金額だった。しかもこの本、「知る」という私たちの営みが、いかに世界と自己を分断するかということ、これもかといくらに書かれている。そういう意味で、普通に「読むでは」ならないのであり、いまだに「読めない」本となっている。

植村 和秀 Kazuhide Uemura

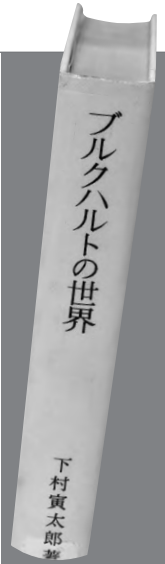
京都産業大学法学部教授。



ブルクハルトの世界

下村寅太郎
岩波書店 1983年

京都学派の哲学者 下村寅太郎 (1902~95) が、19世紀ヨーロッパの歴史家ヤーコブ・ブルクハルトを論じた大著である。下村とブルクハルトは、キリスト教やヨーロッパに限定されない、真に世界的な世界が出現することを見通した思想家である。その世界が現実になったのに、私にはまだ読めない。彼らの視野の深さに、私の精神的体力が耐えられないからである。この本を読むに足る精神的体力をつけるため、私は、世界の変化を見つめ続けていきたいと思う。



前田 耕作 Kosaku Maeda

東京藝術大学客員教授。



契沖全集

岩波書店 1973年

齢を重ねると、本を購入するときの関心事とその折の視野によって1冊だけの購入ということは和書も洋書の場合もほぼない。1冊は完読するが他は参照のため部分読みに終わるが冊数は増えるばかりである。だが冊数は無駄ではない。関心が移ればその中の幾冊かが主役を果たすこともあるからである。今秋、『ローマ宗教文化事典』(原書房)の監修に携わったが、これまで眠っていたギリシア・ラテン語系の洋書がごとごとく蘇ったし、新たな発見も多くあった。眺めながら読み切れない本の中の最たるものはヴァレリー全集カイエ篇に並列させた契沖の全集である。心疼くものはあつても辿り着く確たる道標がまだ見つからないからである。



読めない本!

大音 美弥子 Miyako Ooto

ライター・エディター。



ライブニッツ著作集

ウィルヘルム・ライブニッツ

工作舎 1988～1999年



師匠と仰ぐ松岡正剛氏に勧められるまま、最初から読めるあてもなく、清水の舞台から飛び降りたつもり、という三拍子揃った状況で購入しました。案の定、パラパラした巻が少しあるだけです。しかし、翻訳・発行に11年を費やしている大著。そもそも全集については本場ドイツでも350年かけているというのだから、急ぐ必要はないのかもしれない。一生かけてちよつとずつ読破したいものだ、と思いつつ直しているところです。長生きしたくなります！

西田 彰一 Shoichi Nishida

奈良県立大学ユーラシア研究センター
客員研究員。日本学術振興会特別研究員。



現代史の課題 1957年/1959年

亀井勝一郎
岩波現代文庫、2005年



学生のころ講義で昭和史論争が話題になった際に、図書館で手に取ったのが本書との出会いである。亀井は遠山茂樹・今井清一・藤原彰編『昭和史』（岩波新書、1955年/1959年改版）を対象に、文芸評論家の立場から、歴史学における人間の不在、日常感覚の欠如を批判し、のちに本書に一連の論考をまとめている。これに対して歴史学からは、歴史学と文学の違いを強調する立場、あるいは亀井の戦前の行い（「近代の超克」への参加）を中心に批判が相次いだ。いずれ亀井を、戦前戦後を貫く昭和の思想空間に包摂するような思想史を論じたのであるが、戦後の歴史学批判者である亀井に取り組むには身構えてしまう点が多く、いまだにきちんと読んでいないのが現状である。

田原 一矢 Kazuya Tawara



相対性理論

KADOKAWA【角川武蔵野ミュージアム】

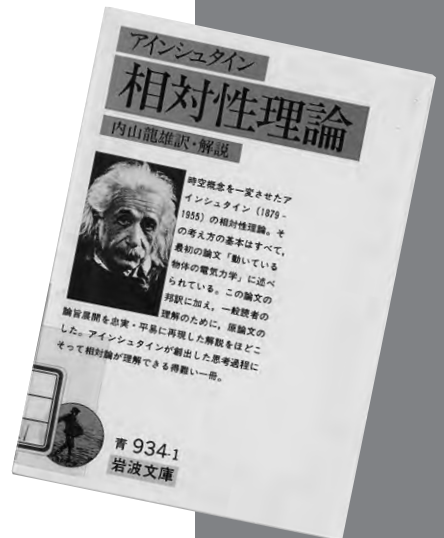
A.アインシュタイン

エディットタウン・プロジェクト選書ディレクター。

岩波書店 1988年

数学が苦手だ。でも興味がある。分かり難いものを知りたい。『よくわかる』系の本である程度は分かっている。でもどうしても数式で、原典が読みたいのだ。

小学校で算数につまずいたせいかもしれない。1と2の間には何もないと教えられ、本当だろうかと思った。しかし数学脳がない悲しさで、その先を考えられないうちに授業は進んでいた。そして未だに数式を読むことはできない。いつの日か：それが私の夢だ。



青木 健 Takeshi Aoki



H・P・ブラヴァツキー夫人 -近代オカルティズムの母

静岡文化芸術大学
文化・芸術研究センター教授。

ハワード・マーフェット／田中恵美子訳
竜王文庫 1981年



筆者はゾロアスター教の研究者だが、インド在住の近代ゾロアスター教徒たちは、19世紀に急激にヨーロッパ・オカルティズムに傾倒し始める。中でも、ブラヴァツキー夫人が創立した神智学協会が優勢で、一時期のインド・ゾロアスター教徒の何割かは神智学協会の会員だった。筆者は近代ゾロアスター教思想を研究していくうちに、どうしても神智学協会とゾロアスター教との関係を説明する必要を感じ、本書を手にとった。しかし、それまでに習い覚えた実証的な文献研究とは相容れない部分が多く、未だに通読できていない。いつか機会があったら、またこの主題を取り上げてみたいと思っている。

